

日本バングラデシュ協会の皆様へ

■目次

*目次の見出しをクリックして頂ければ、直ちに本文に移ります。

■1) 巻頭言:『バングラデシュ独立と美術作家たち(3)――サイド・アブドゥッラー・カリッド』

福岡アジア美術館学芸員
会員 五十嵐理奈

■2) 寄稿:『ベンガル語ラップから見えてくる世界』

南アジアポップミュージックブロガー
軽刈田 凡平(筆名)

■3) 理事書評:『SDGs 時代の国際協力ーアジアで共に学校をつくる』

ー西村幹子/小野道子/井上儀子共著 [岩波ジュニア新書 931] (2021 年 岩波書店)ー

関東学院大学講師
理事/事務局次長 石坂貴美

■4) 理事連載:『バングラデシュの独立に寄り添う(1971 年 10 月):

ソ連の決断と中国の国連加盟』

ーバングラデシュ独立・国交 50 周年記念シリーズ No.16ー

理事 太田清和

■5) イベント、講演会の案内

■6) 『事務連絡』

■1) 巻頭言:『バングラデシュ独立と美術作家たち(3)――サイド・アブドゥッラー・カリッド』

福岡アジア美術館学芸員
会員 五十嵐理奈

バングラデシュ独立運動に関わった4人の美術作家を、独立の発端となった言語運動、
独立戦争時、戦後にわけてコラムで紹介する。

解放戦士 3 人の像《オポロジヨヨ・バングラ(征服されざるベンガル)》は、バングラデシュの独立戦争を記念した公共彫刻として、もっとも広く知られる作品であろう。ダッカ大学文学部の前に立つ高さ6mほどの立像は、彫刻家サイド・アブドゥッラー・カリッド(Syed Abdullah Khalid, 1945-2017)が手がけた作品である(図1)。

3人の解放戦士は、みな顔を上げて凛々しく未来を見据える。中央には銃を肩に担ぎ手榴弾を握った農民の解放戦士、その右には救急箱を携えたサリー姿の女性、そして左には銃を手にした若い学生の志願兵が立つ。農民、女性、学生などあらゆる人々が独立のために戦ったことを示し、征服されることのないベンガルの栄光と理想を表す写実的な彫刻である。

戦後、若きカリッドは、独立戦争に直接銃を手にして参加できなかったことに自責の念を抱き、苦闘の独立を象徴する作品を手がけたいと願っていた。そんな矢先の 1973 年、ダッカ大学中央学生連合委員会から独立戦争の栄光を示す記念碑制作の依頼を受けた。すぐに模型制作に取り掛かり、翌 1974 年には予算の制約から安価な再生コンクリートを用いて実際の大きさでの制作を始めた。しかし、1975 年 8 月 15 日に建国の父ムジブル・ラーマンが暗殺され、政治不安から制作は中断。その後、イスラームの宗教団体から人型の彫刻を制作すべきでないという妨害を受けたり、彫刻が破壊されそうになるなど、プロジェクトは難航した。

ムスリムが多い Bangladesh では、ヒンドゥーの神像制作と見紛う人物彫刻に携わることに理解をえるのが難しい。そもそも東パキスタンで初めて彫刻の展示会が開かれたのは、1948 年にダッカ美術学校ができてから 10 年以上が経った 1960 年のことで、さらにダッカ美術学校に彫刻科ができたのは、開校から 17 年も経た後の 1965 年になってからのことである。彫刻不遇の時代を経て、Bangladesh という自由な国を勝ち得た独立後になると、独立戦争を記念する具象的な彫刻、記念碑が全国につぎつぎと建てられていったのである。《征服されざるベンガル》は、そうした公共彫刻の先駆けであった。

さて、カリッドが本作の制作を再開できたのは、中断から 3 年余りが経った 1979 年初めのことであった。人物像のまわりに足場を組み、カリッドは毎日昼も夜も大きなコンクリートの像に張り付くようにして形を削り出していった。その制作する姿をリキシャ引きや子どもなど多くの人が集まって見上げていたという。《征服されざるベンガル》は、その制作過程に街を歩き交う人々の眼差しや歓びの声を吸い込んで、1979 年 12 月 16 日の戦勝記念日に完成した。自由を象徴する記念碑は、さまざまな政治活動や運動などの集会場所となり、今も Bangladesh の人々のなかに生きる(図2)。



(図1) サイド・アブドゥッラー・カリッド《征服されざるベンガル》1979 年 (1983 年、常木新二撮影)



(図2) 2008 年の戦勝記念日のパレードでは、ダッカ大学芸術学部の学生たちが制作した《征服されざるベンガル》の複製が山車となって街を練り歩いた。(Saiful Wadud Helal 監督「Aparajeyo Bangla」2011 年、56 分より)

■2) 寄稿:『ベンガル語ラップから見えてくる世界』

南アジアポップミュージックプロガー
軽刈田 凡平(筆名)

みなさんは、バングラデシュの音楽と聞いて、何をイメージするだろうか？ 素朴な民謡や、吟遊詩人にして修行者であるバウルの謎めいた歌、あるいはタゴール・ソングのような、今なお愛唱されている大詩人が作った歌だろうか？ だが、今回私が紹介するのは、そうした伝統からはかけ離れた音楽だ。ベンガル語のヒップホップ——、今、バングラデシュで最も新しく、熱い音楽である。

申し遅れました。軽刈田 凡平(かるかった・ぼんべい)と申します。普段は、南アジアの音楽のなかでも、伝統音楽や商業音楽ではない、ヒップホップやロックなどのインディペンデント音楽について『アッチャー・インディア 読んだり聴いたり考えたり』というブログに書いています。今回は、自分のペンネームにバングラデシュの地名が入っていないことを申し訳なく思いつつ、この記事を書かせていただいています…。

ヒップホップとバングラデシュ

リズムに乗せて語るように歌う「ラップ」は、1970年代にニューヨークのブロンクス地区で「ヒップホップ文化」のひとつとして誕生した。アフリカ系アメリカ人が多く暮らすこの街から生まれたラップは、クールで刺激的なポップカルチャーとしてあつという間に若者たちの間で人気となり、やがてマイノリティの声を届けるアートフォームとしても大きな意味を持つようになった。その波は、アメリカ国内にとどまらず、衛星放送やインターネットを通じて世界中に広がっていった。

バングラデシュも例外ではない。アメリカやイギリスに移住したバングラデシュ系移民たちから母国に持ち込まれたヒップホップは、初期の段階では不良的なファッションの要素が強かったが、今では若者が政治や社会に物申す手段にもなっている。

佐々木美佳監督のドキュメンタリー映画『タゴール・ソングス』の中で、ダッカのストリート・ラッパー、ニザム・ラビ(Nizam Rabby)が「タゴールの『ひとりて進め(Ekla Cholo Re)』に影響を受けた」と語っていたのを覚えている人もいるだろう。現代的なラッパーと詩聖とも呼ばれるタゴールの組み合わせに違和感を覚えた人もいるかもしれないが、ヒップホップにおいては、自らのルーツやコミュニティを誇る(represent=レペゼンする)ことは大事な要素のひとつである。彼が語ったタゴールへのリスペクトは、ベンガルのラッパーとしてのきわめて正統的な表現なのだ。

ダッカの「ガリーボーイ」

南アジアでラップを一躍人気ジャンルに押し上げたのが、2019年に公開されたハリウッド映画『ガリーボーイ』だ。「ガリー」とはヒンディー語で「路地」を意味する言葉で、南アジアのヒップホップにおいては、路上の社会空間を意味する「ストリート」にあたる言葉として使われている。ムンバイのスラム街を舞台に、実在のラッパーをモデルにして作られたこの映画によって、一部の若者たちのカウンターカルチャーだったラップは、多くの人々に知られることとなった。

この人気に乗じて、「ダッカ版ガリーボーイ」として一躍注目を集めた少年がいる。ダッカの路上で花売りをしていた、当時10歳だったラナ君である。ダッカ大学の学生でラッパーでもあるタビブ・ムハンマドに才能を見出された彼は、社会の矛盾や教育の必要性をラップした曲で大きな注目を集め、ストリートの少年ラッパーとして話題となった。

多様化するバングラデシュのラップ

首都ダッカだけではなく、いまではバングラデシュじゅうの都市にラッパーがいる。海外在住のバングラデシュ系ラッパー

も母国をマーケットとした活動をしているし、女性ラッパーが保守的な社会に対してラップの歌詞で意見を表明する例もみられるようになった。同じベンガル語圏であるインドの西ベンガル州にもコルカタを中心としたラップシーンがあり、バングラデシュとはまた異なる雰囲気 of ラップを聴くことができる。

アフリカ系アメリカ人のカルチャーとして生まれたヒップホップは、バングラデシュでも社会や伝統と結びついたポピュラーカルチャーとなった。グローバルかつローカルなこの文化が、今後この国で何を表現してゆくことになるのか、これからも注目してゆきたい。

～ラップを実際に聴いてみたい方に～

ラナ君のラップは、YouTube にある“Gullyboy Part 1 | Rana | Tabib | Bangla Hip Hop Song |”等を参照。Part 3 までの3部作になっている。各地のラッパーについては、例えばYouTube で「バングラデシュの都市名(スペース)raper」で検索すると見つけることができる。女性ラッパーでは、ノウシン[Nawshin]の楽曲“Bakruddho”、在外バングラデシュ系ラッパーについてはバンガ・バングラ[Bhanga Bangla]などを参照のこと。コルカタのラッパーはシズィー[Cizzy]等。バングラデシュのラッパーと比べて、より文学的・内面的な要素が強い印象だ。いずれもYouTube でミュージックビデオを見ることができる。

なおわたしのブログはこちらになります

[アッチャー・インディア 読んだり聴いたり考えたり \(blog.jp\)](#)

■3) 理事書評:『SDGs 時代の国際協力ーアジアで共に学校をつくる』

ー西村幹子/小野道子/井上儀子共著 [岩波ジュニア新書 931] (2021 年 岩波書店)ー

関東学院大学講師

理事/事務局次長 石坂貴美

1. アジアキリスト教教育基金(ACEF)の活動を通じて国際協力を考える

今年の2月に出版されたこの書籍は、本協会の法人会員である特定非営利活動法人アジアキリスト教教育基金(The Asia Christian Education Fund, 以下 ACEF)の30年にわたる活動にかかわってきた人びとの変化を基に、国際協力とは何かを考える機会を与えてくれる良書です。また、共著のひとりである小野道子さんは本協会の会員でもあります。

ACEF は、バングラデシュの現地のパートナーNGO である Basic Development Partners(以下、BDP)とともに、「バングラデシュに寺子屋を贈ろう」という目的と「アジアの諸問題に積極的に取り組む青年を育成すること」を目的に掲げて、1990 年から活動を続けています。

(註)ACEF のこれまでの取り組みについては、メールマガジン 67 号(2020 年 1 月号)および 68 号(2 月号)に紹介されているので是非参照ください。

2. 現地における学校運営

青空の下で授業を行う寺子屋から始まり、現地の要望や事情に応じて学校施設の建設、成人識字教室や溶接、木工、電気、自動車修理そしてコンピューターの技術を身に付けることのできる職業訓練校の運営も行ってきました。小学校の卒業生は 1.7 万人以上、職業訓練校の卒業生は約 2 千人、多くの人びとが学ぶ機会を提供してきました。学校へ行くことができない子どもの多い地域、都市のスラムや農村において、全国 40 以上の学校運営を支援してきました。

本書では小学校の卒業生らにインタビューを行っています。なかには卒業後に最高学府であるダッカ大学へ進学し、銀行員となって活躍している女性もいます。彼女の両親は学校へ通ったことがなく、以前は村にも学校がなかったことから、「ACEF の学校が村に設立されなかったら学校へ行くこともなかっただろう」と話しています。この本を読むことでさまざまな困難によって学校へ通うことができない子どもたちの状況、そして、教育がいかに人の人生に大きな影響あたえるかということがわかります。

3. 交流による日本の青年たちのその後の変化

ACEF は現地の学校運営のみでなく、スタディツアーを開催しています。高校生、大学生の青年層を中心に、さらに社会人から 80 代まで幅広い年齢層の参加者が日本から現地を訪れ、現地の人びとと交流する機会を持ちました。その数は 788 人にのぼります。日本の日常生活と大きくことなる現地の暮らしに多くの「衝撃」を受けた参加者が、さらに人びととの交流、参加者間で行われるふりかえりを通じて、貧困とは何か、幸せとは何か、自分に何かできるのか、といった考えを自分なりに深めていく様子がよくわかります。また、帰国後は、現地での経験を積極的に発信したり、自分にできることを実践したりと、能動的に動く姿が紹介されています。本書の共著者の 3 人は、このスタディツアーの参加者でその後、ACEF の取り組みにかかわったり、国際教育協力を専門として大学の教壇にいたり、子どもの保護の専門家として実践、研究を続けるなど各方面で活躍しています。

4. 一方通行でない国際協力を再考する

国際協力の方法は、国連のような国際組織、国として途上国を支援する政府開発援助(ODA)などさまざまです。日本国内での日常生活では、遠い国の途上国の暮らしを意識するという機会はなかなかなく、国際協力というのは身近に感じられることではないかもしれません。

本書では、ACEF が国際協力を行う上で、援助する側が支援するという一方通行ではなく、「同じ目標に向かって誰かと一緒に力を合わせて働くこと」を最も大切にし、現地のパートナー NGO や人びとと共に活動を続けてきたことが丁寧に説明されています。また、現地の人びとと共に日本の青年たちも多くのことを学び、交流を通じてお互いに多くの貴重な学びの経験を得てきたという、双方向に影響を与えてきた多くの事例が紹介されています。

本書は、バングラデシュの教育について知るとともに、国際協力の多様性について、また、自分なりの国際協力について考える良い機会になるおすすめの書籍です。

■4) 理事連載：『バングラデシュの独立に寄り添う(1971 年 10 月)：

ソ連の決断と中国の国連加盟』

ーバングラデシュ独立・国交 50 周年記念シリーズ No.16ー

理事 太田清和

1.ソ連の対印軍事支援の決断

(1)イラン東南部に住むバシュトウーン民族(註：アフガニスタンのタリバン政権の支持基盤)は、国境を接するアフガニスタンとパキスタン両国にわたって分布している。1969 年ティッカ・カーンは自治権拡大を求めるバシュトウーン民族が住むバロチスタンを武力弾圧で封じ込め、『バロチスタンの屠殺人』と恐れられた。ヤヒアはティッカ・カーンを起用し、東パの武力弾圧を行った。

東パ問題は民族自決権の問題のため、パの国家の一体性を揺るがすのみならず、成り行き次第ではイランに波及しかねない。このためシャーは、3 月の武力弾圧直後に秘密裏に対パ武器供与を行ったが、印に直ちに察知され、厳しい抗議を受けた。その後もシャーは印パ関係の悪化に気を揉み、印パの仲介を図ろうとしたが、ヤヒア、ガンディー何れも聞く耳を持たない。

そこへ印ソ条約である。イランは当時米パと同盟関係にあり、ソ連の南下を恐れていた。ソ連が印を支援し、東パが分離独立するとなれば、イランにとって内外両面で悪夢となる。

(2)そこでシャーは、ソ連を通じて印を抑えようと考え、10 月中旬のペルセポリスでのイラン建国 2500 年式典の機会に、10 月 15 日にヤヒア・ポドゴルヌイ会談をセットした。

○ポドゴルヌイはガンディー(9 月 28 日)との会談を踏まえヤヒアに説いた。

- ・どうしてムジブルを釈放し、政治対話を始めないのか？
- ・ムジブルは政治的解決の鍵であり、釈放すれば物事は上手く動いていくではないか？

○ヤヒアは苛立ち、ポドゴルヌイに対し強く反論した。

- ・あの裏切り者と話す気持ち一切ない。
- ・今取り組んでいる民政移管プロセスを進めれば、年末までに満足する成果が得られる。

○双方応酬の後、ポドゴルヌイはヤヒアに申し渡した。これが最後通牒となった。

- ・日ごとに事態が深刻になっていく。
- ・現実性のない民政移管計画に希望を託すべきでない。
- ・残されている時間にも限りがあるぞ。

(3)22 日、ソ連のフィリユーピン外務次官はニューデリー入り、印ソ条約第 5 条に基づき防衛のため相互協議を行い、完全な合意に達した。28 日、ソ連軍のクタクホフ空軍司令官を団長とする一行がニューデリー入り、印に供与する武器に関し協議を開始した。同日、シン外相は印議会に対し、印はソ連に全面支援を期待出来ると言明した。11 月に入ると、ソ連からミサイル、戦車などの武器が次々と空輸され、これら武器を操作・訓練する要員も印入りした。

2.ソ連の決断の背景

わずか 1 ヶ月でソ連の態度が大きく変わった。逆転したとすらいえる。印の懇請にソ連が応じた形となつてはいるものの、ソ連としては、印ソの二国間関係のみならず、グローバルな視野に立って戦略的判断を下したはずである。次の二つの背景を指摘できよう。

(1)第1は、9 月 3 日の米ソ英仏4ヶ国によるベルリン協定の調印である。69 年より、西独のブラント社民政権は、東西欧州の国境を追認し、武力不行使、緊張緩和を求め、『東方外交』を本格的に推進した。70 年 8 月に西独・ソ連条約を締結したが、米英仏ソ4ヶ国が管理するベルリンの地位の取扱いが未解決の課題として残った。当然ながら、米英仏は西独の『東方外交』、その先駆けの西独・ソ連条約に根強い警戒心を抱いていた。西独がイニシアティブを取って粘り強い外交努力で、米英仏の警戒心をほぐ



米英仏ソ4ヶ国がベルリン協定に調印
(1971 年 9 月 3 日)

し、ソ連との間でベルリンの取扱いに合意を得ることに漕ぎ着けることができた。これは欧州の東西関係が安定化に向う鍵であった。米英仏ソ4ヶ国がベルリン地位協定に調印することは、西独・ソ連条約を実質のあるものとするとともに、米英仏を欧州の緊張緩和にコミットさせることになる。これこそはソ連が戦後 25 年間待望していたものだった。

(2)第2は、10月12日の米ソ両国のニクソン訪ソの共同発表である。ニクソンが69年1月の就任演説で、平和への交渉を呼びかけると、ソ連は直ちに応じた。69年11月ヘルシンキで、SALT(戦略兵器削減条約)交渉が始まり、ABM(弾道ミサイル迎撃システム制限条約)も取上げられた。核軍縮交渉は、軍事技術、検証、法的担保など専門的事項に加え、交渉の駆引き、政治的思惑も絡み、合意の達成が難しい。ソ連は「ニクソンが訪ソを切望しているので遅延すれば有利になる」とSALT交渉で遅延戦術をとった。7月15日のニクソン訪中発表後、米ソ交渉が急速に進展した。ニクソン・キッシンジャーは、中国カードを切りソ連を焦らせることで、ニクソン訪ソ共同発表を早めることが出来たとする。他方、ソ連にしてみれば、ニクソン訪ソの共同発表で、米ソ関係の安定化を図ることが出来たとする。

こうしてソ連は、この1ヶ月余りの間に、①欧州の東西関係、②米ソ関係という二大課題に目途を立てることが出来た。ソ連は大きく安堵したのである。

3.ソ連の決断の狙い

ソ連にとり、次なる課題は中国の封じ込めとなる。

(1)中国は、ニクソン・キッシンジャーから米ソに次ぐ三極であると持ち上げられ、米国の対ソ戦略の梃子に利用されようとしていた。また国際舞台に再登場し、西欧諸国と国交を結びはじめ、さらに第三世界の代表者となりつつあった。ソ連主導の社会主義世界に挑戦する中国を放置できない。

(2)ソ連の対印軍事支援は、武器供与などであり、軍隊を派遣する訳ではない。軍事支援に伴うリスクも亜大陸地域に限定される。ソ連は、①欧州の東西関係と②米ソ関係で基本合意を達成した以上、対印軍事支援に踏み切るにあたり、恐れるものが無くなった。

(3)ソ連は中ソ国境に数十万の軍隊を配備し北西両面から圧力をかけているので、印を軍事支援し、バングラデシュを独立させれば、南面からも中国に圧力をかけることが出来る。ソ連にとって対印軍事支援は、中国を牽制し、圧力をかけるに手頃なカードではなかったのではなかろうか？

(4)国際世論は圧倒的に反ヤヒア・反パキスタンである。したがって国際社会から大きな反発を招くことはない。ポドゴルヌイは、ヤヒアにムジブル釈放と政治的解決を求め、ヤヒアに引導を渡した。したがって大義名分も立つ。ニクソン・キッシンジャーは、戦略問題(米ソ関係など)が地域問題(亜大陸問題)に優先するとしたが、これはソ連にとっても同様であった。

4.中国の国連加盟と日本

(1)中国代表権問題をめぐっては、1年間にわたる激しい攻防戦が繰り広げられた末、10月25日の国連総会では、国民政府の議席維持を図ろうとした日米などの共同決議案が僅差で敗れた。中国が国際社会に再登場する流れにあって、国民政府(台湾)が全中国を代表し、かつ安保理常任理事国となっているのは、不自然でフィクションそのもの。表決結果は必然であったともいえよう。

日米の敗因となったのは、①7月15日のニクソン訪中の発表、②表決に先立つ10月20日~25日のキッシンジャー訪中であった。中川融常駐代表(当時)は、ブッシュ常駐代表(後の米国大統領 Sr.)と緊密に連携・協力して選挙戦を戦ったが、「振り返ってみると、米国が、ホワイトハウスは北京、国務省は台北を支援するという矛盾した外交をしていたから、勝てる訳がなかった」と述懐している。



国民政府代表、国連総会を退場
(1971年10月25日)

(2)佐藤政権は、ニクソン訪中で頭越しされ、国連中国代表権で敗北し、相次いで面目を失う形となった。ベトナム戦争、沖縄返還、繊維摩擦など、日本国内には対米不満が鬱積し、佐藤外交は『対米追従』との批判を浴びた。野党のみならず、自民党の過半の議員たちも中国との国交正常化を望み、国民の間でも中国ブームが高揚していた。日本の各界要人が相次いで『北京詣で』をすると、周恩来は「軍国主義の佐藤政権は相手にしない」と一貫して主張。佐藤政権の命脈はほぼ尽きかけていた。

愛知代表(前外相)以下日本代表団は、国連中国代表権表決での敗北を受けてサバサバとしていた。外務省自身、当初「到底勝目がない」とした選挙戦を 1 年間にわたり戦い、表決直前には勝利の可能性も浮上するまで善戦したからである。「負けいくさではあるが、善く戦った。佐藤総理がこだわった国民政府への信義は十二分に尽した」との思いがあった。

(3)1951 年 12 月、吉田茂総理は米国のダレス特使の求めに応じる形で、サンフランシスコ講和条約の締結先として国民政府を選択した。この選択を伝達した吉田書簡を受け、米議会が同条約を承認し、52 年 4 月同条約が無事発効、日本は独立を回復した。東西冷戦と朝鮮戦争の下、独立回復のために、中国を代表し国連常任理事国であった国民政府を選択したのは、やむを得なかった。吉田が「米国の圧力に屈したのか」それとも「自主的に選択したのか」はともかく、独立回復後 20 年間に限れば、日本が軽武装の平和国家として世界第二位の経済大国へと発展を遂げることが出来た。適切な選択だった。他方、中国との国交正常化は、戦後日本外交の最大の未解決課題として残った。但し、日中関係は、貿易、文化、人的交流など実務面では、他国を圧倒していた。

ニクソンショックによって、米国は日本が対中国交正常化を交渉することに、異議を唱えることが出来なくなった。中国の国連代表権が北京に帰した以上、日本が対中交渉しても内外から正統性を問われることがなくなった。日本が戦後最大の未解決課題に取り組む幕が開かれたのである。周恩来の「佐藤軍国主義政権を相手にしない」という言辞も、「佐藤政権でなくなれば」との『含み』が読み取れる。日本が取り組む外交目標がハッキリと見えてきた。

(4)台湾は、1960 年改訂の日米安保条約で、第 6 条が適用される『極東』に含まれる。これが日本政府の統一見解である。

佐藤政権は、沖縄返還を合意した 1969 年の日米共同声明で『台湾条項』を明記した。「大統領は、米国の中華民国に対する条約上の義務に言及し、米国はこれを遵守するものであると述べた。総理大臣は、台湾地域における平和と安全の維持も日本の安全にとつてきわめて重要な要素であると述べた。」

周恩来の佐藤政権批判の矛先は、この『台湾条項』に当てられていた。佐藤政権が退陣しても『台湾条項』は残り、今日につながっている。

(註)『米華相互防衛条約』は、1979 年の米中国交樹立とともに無効となったが、同年米議会が『台湾関係法』を制定し、米国が国府とそれまで締結してきた全ての条約・協定を維持することとなった。

■5) イベント、講演会の案内

■コレクション展 バングラデシュ独立 50 周年記念

「わが黄金のベンガルよ」

<https://faam.city.fukuoka.lg.jp/exhibition/11455/>

(福岡アジア美術館)

期間:2021 年 9 月 23 日 (木) ~ 2021 年 12 月 25 日 (土)

会場:アジアギャラリー

「わが黄金のベンガルよ」この誇らしげな言葉は、ベンガル人のロビンドロナト・タクルによって投げかけられました。ベンガルを代表する詩人の名前ですが、きつこう紹介した方がわかりやすいでしょう。アジア人ではじめてノーベル文学賞を受賞した「インド人のラビンドラナート・タゴール」と。

タゴールが詩集『ギーターンジャリ』によって、ノーベル文学賞を受賞したのは 1913 年のこと。このとき、タゴールの生まれた「ベンガル」という土地は、まだインドとバングラデシュに分かれておらず、イギリス領インド帝国の一部でした。この土地は古来より豊かな自然と文化を育み、そこに住む人はベンガル人と呼ばれていました。「ロビンドロナト・タクル」という名も、タゴールのベンガル語の名前なのです。

その詩聖タクルがゴゴン・ホルコラ(バウルと呼ばれる歌い人)の旋律にのせて、1905年に作詩したのが、この「わが黄金のベンガルよ」です。ベンガルの大自然を礼賛したこの歌は、後の1971年に「ベンガル人の土地」を意味する「バングラデシュ」の国歌となり、この国のために命を燃やす人々を熱く鼓舞し続けてきたのです。

今回のコレクション展では、激しい独立戦争を経て1971年に独立したバングラデシュに焦点をあて、生きることへの苦難と喜びが交錯するこの国の美術の50年をたどります。

1. 独立、そして終わらない苦闘

第二次世界大戦が終結してしばらく経った1947年、それまでイギリスに植民地支配されていたインド帝国は、インドとパキスタンに分離独立を果たしました。そこで複雑な状況に追い込まれたのがベンガル州で、ヒンドゥー教徒の多い西ベンガルがインドへ、イスラーム教徒の多い東ベンガルはパキスタンへ統合されることになったのです。

しかしながら、インドを挟んで東西に分かれた2つのパキスタンは、政治・経済的に西側(現パキスタン)が優位に立ち、東側(現バングラデシュ)に不満が渦巻きました。そのひとつの例が西パキスタンのウルドゥー語だけを公用語にした問題で、これに対しベンガルの人々は激しい反対運動を展開したのです。

その後、1970年の選挙で東パキスタンの政党が勝利すると、東西の対立はより先鋭化し、1971年3月には西パキスタン軍が東へ侵攻し、バングラデシュ独立戦争へと発展します。そして同年12月、インドの軍事支援(第三次印パ戦争)を受けたことで、バングラデシュは西パキスタンとの戦いを有利に進め、念願の独立を果たしました。しかし、この戦争はベンガル人の多くの命を奪うとともに、その傷痕はいまも深く社会に刻み込まれているのです。

2. ベンガルの豊かな自然と文化

ロビンドロナト・タクルの「わが黄金のベンガルよ」に歌われているように、ベンガルの土地は「マンゴーの森にみちる香しさ」や「実り豊かな稲田」などの豊かな自然に恵まれ、いまでも大部分の国民が農村で暮らしています。カンタという刺繍の作品《黄金のベンガル》には、まさにそうした情景が描写されています。

一方、バングラデシュの都市部に目を向ければ、国の中央部にある首都ダッカ、そして南東部にある港湾都市チッタゴンも、古くから経済的にも、文化的にも発展してきました。

美術の分野においても、1948年に設立されたダッカ美術学校を前身とするダッカ大学芸術学部と、1968年に設立されたチッタゴン大学芸術学部を中心に、バングラデシュ独自の抽象的なモダニズム絵画や、社会批判的なリアリズム絵画が生み出されてきました。このほか、映画やリキシャ・ペインティングに代表されるような大衆芸術、テラコッタやポトの素朴な造形など、バングラデシュの多彩な視覚表現は、ベンガルの自然や社会の写し鏡として、いまも人々の心をとらえて離しません。

■第38回講演座談会のご案内 2021年11月13日(土) (オンライン開催)

演題 講演座談会 バングラデシュに救援を! —50年前の市民運動を振り返って—

講師 奈良 安紀子 奈良毅『日本ベンガル友の会』会長夫人

鈴木 孝昌 『日本ベンガル友の会』メンバー

渡辺 博 『日印サルボダヤ交友会青年部』メンバー

有光 健 『日本バングラデシュ連帯委員会』メンバー

司会 太田清和 『日本バングラデシュ協会』理事/メルマガ編集長

主催 一般社団法人 日本バングラデシュ協会

今回は、50 年前の 1971 年 11 月、日本では Bangladesh 救援のため市民運動が最高潮を迎えました。3 月の武力弾圧の後、東パキスタン出身の留学生達を支援することで始まった日本の市民運動は、大量の難民を支援するうねりとなり、その先に Bangladesh の独立を見据えるものとなっていきました。

当時、日本ベンガル友の会、日印サルボダヤ交友会、日本 Bangladesh 連帯委員会など、多様な団体/個人が、人道主義の立場から、ゆるやかな連携をとりながら支援活動を行っていました。当時の関係者の方々が Bangladesh 独立前後の救援活動を振り返っての座談会です。

1. 日時 11 月 13 日(土)14:00~16:00

オンライン(ZOOM)による開催

2. 申し込み先 グーグルフォームに必要事項を記載の上お申し込みください。

●グーグルフォーム <https://forms.gle/oU1tuXMfmej7XKEP8>

(お申し込みの方に後日 URL とパスワードをお知らせいたします。)

*参加希望の方は 11 月 8 日迄にお申し込みください。

お問い合わせ先: info@japan-bangladesh.org

■講師のプロフィール

・奈良安紀子

故奈良毅東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授の夫人。
ご主人であった奈良毅教授は、ベンガル言語文化の研究者。1971 年 4 月に『日本ベンガル友の会』を立ち上げ、東パキスタン問題をアピールする市民運動を率いました。安紀子夫人は、奈良教授が教鞭を執っていた清泉女子大学の学生で、1971 年 12 月に結婚。1974~76 年、奈良教授が国際交流基金の派遣によりダッカ大学で日本語教育を行うにあたり、一緒にダッカ生活を送りました。(メルマガ第 12 号、第 83 号参照)

・鈴木孝昌

『日本ベンガル友の会』メンバー(オリエンタル・システム代表、豊橋在住)

難民問題への関心から『日本ベンガル友の会』の募金に応じ、奈良毅会長との出会いを契機に入会しました。インドの難民キャンプの視察・写真撮影のため、立石電機を退職。退職金で私用車を購入し、11 月に全国縦断 Bangladesh 難民支援キャンペーンのキャラバンをしました。奈良会長と一緒にフジ TV『小川宏ショー』や NHK『スタジオ 102』に出演し、Bangladesh 難民への支援を訴えました。(メルマガ第 89 号参照)

・渡辺 博

『日印サルボダヤ交友会青年部』メンバー

アジア・アフリカ学院でヒンディー語を学び、講師のインド人留学生を通じ、サルボダヤ交友会に交わりました。サルボダヤ交友会では若者達が社会や政治問題を活発に議論し、東パの武力弾圧と難民問題もその一つのテーマであり、6 月にガンディー研究所と共催した J.P.ナラヤンの非暴力を訴えた講演会では録音係を務めました。10 月~12 月には青年部のメンバーとして、街頭募金活動を行いました。(メルマガ第 89 号参照)

・有光 健

『日本 Bangladesh 連帯委員会』メンバー(現在早稲田大学国際和解研究所)

早稲田大学在学中に、高野秀夫江戸川区議らが呼びかけた日本バングラデシュ連帯委員会・東京グループ準備会に参加しました。『日本バングラデシュ連帯委員会』は社会改革をめざす革新色の強い組織でした。関西では鶴嶋雪嶺関西大学教授が中心となっており、名古屋はじめ全国にゆるやかなネットワークを持ち、バングラデシュ独立問題の啓蒙と支援のため、シンポジウム、街頭募金などの活動を行いました。

■6)『事務連絡』

○協会行事・講演会等記録動画の開示： ホームページの会員向けメニューで順次会員の皆様に公開してまいります。詳細は近々改めてご案内致します。

○会員情報変更届のお願い： 事務局では会員各位の連絡先等の最新版を常備する必要がありますので、皆様の住所変更、メールアドレスが変更されました場合は今後は <jimukyoku@japan-bangladesh.org> までお知らせ下さるようお願い致します。

○本協会の活動などについてご意見等ありましたら、お知らせください。また、メール・マガジンに載せたいご意見、情報、その他昔のバングラデシュ勤務時代の思い出などお寄せ下さい。宛先： jimukyoku@japan-bangladesh.org (約 1500 字。体裁上若干の修正あり得ることご了承下さい。)

=====

一般社団法人 日本バングラデシュ協会

<http://www.japan-bangladesh.org/>